

発行所 (郵便番号100)

東京都千代田区丸の内2-4-1
丸ノ内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447編集責任者 高須 裕 三
印刷所 関東図書株式会社

定価200円 (年間購読料参千円)

1978年11月25日発行

第10巻 第11号

(毎月1回25日発行)

昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.10 No. 11

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

スウェーデンの美術教育とその背景

Art and Craft Education in Sweden

阿部 靖子 氏

Miss Yasuko Abe

私は1977年9月3日から、約1年間、スウェーデンで勉強する機会を得ました。これは、文部省の教員養成大学、学部学生海外派遣制度によるもので、将来教師になろうとするものに、国際的視野を持たせ、外国の理解とともに広い知識を与えることを目的としています。

私は、美術を専攻し、以前から工芸に関して興味を持っていました。スウェーデンのクラフトを背景とした芸術教育は、私の最も関心のあるところであり、北欧の福祉社会の中での総合義務教育や学校全体の中での芸術教育の意味など、これから教師になろうとしている私にとって、また日本の芸術教育を考えていくうえで、必要なことだったのです。

スウェーデンでは、ストックホルムにあるテクニングスレーラルインステチュート (Tecknings lärarinstitutet) という美術教員を養成する大学の3年生に編入され、その学生とともに勉強することができました。スウェーデンの美術教育は、テクニング (Teckning) という日本ではいう絵画、彫刻などを中心にしたものと、スロイド (Slöjd) という工芸を中心にしたものがあります。そして、このスロイドの授業は、日本の技術科や家庭科の分野とされているものも多く含み、総合的工芸教育をおこなっているわけです。

まず、大学の授業の様子を紹介すると、私の入った3年生では、グループ活動を中心にしていました。前期に1つ、後期に1つ、学生が自分達のやりたいテーマに応じてグループをつくり、独

自の活動をしていきます。美術館、博物館などの見学をはじめ、各グループで自分達に必要な様々な活動を計画し、先生は、助言、指導という形をとっていました。すべて授業は、グループの話し合いによって進められているわけですが、私の加わったグループでは、グループのテーマとそれについての考えをみんなで話し合ったうえで、分担、個人制作という形をとっていました。共同制作をしたグループもあります。何回か他のグループに発表し、話し合いをしながら自分達で授業を進めていくわけです。3年生は週1日教育実習があり、毎日交互で実習校へ出かけていくので、このようなグループ活動の授業形態になったのかもしれませんが、とにかく、私が今まで日本の大学で経験したことのない授業の方法を経験できたことは、とても有意義なことでした。

次にスウェーデンの美術教育についてもう少し書きますと、スウェーデンでは小学校3年生になるとスロイドの教科が独立し、週2時間、4～6年生までは週3時間、7、8年生は週2時間、9年生は1時間となっています。また、テクニングの授業は、小学校4年生から教科として独立し、

目 次

スウェーデンの美術教育とその背景	阿部 靖子氏… 1
スウェーデンの家庭生活	秋元 薫氏… 4
最近のスウェーデン経済・社会ニュース	7

6年生まで週2時間、7、8、9年生はスロイドと同じ2、2、1時間となっています。将来はもっと増やしたいとの事でしたが、日本に比べるとやはり美術教育にあてる時間が多いと言えるでしょう。そして、このスロイド教育はスウェーデン独自の意味深いものなのです。スロイドについては多くの人が興味を持ち、織物や家具などの勉強でスウェーデンを訪れる人も多いことでしょう。私は、このスロイドというものが普通教育の中の美術教育において、どのような役割を持っているのか、非常に興味を持ちました。また、このスロイドをうみ出し、今なお教育の中に取り入れている社会的背景を考えることも大切なことだと考えます。スロイドの授業の内容は、木工 (träslöjd) と金工 (metall slöjd) それに革や角や他の材料を使ったものと、ヘムスロイド (Hem slöjd) と呼ばれる。織物、縫物、編物などを扱うものがあります。それぞれ学校には、スロイドのための素晴らしくゆき届いた設備と道具が用意されていて、生徒は自由に様々なものを制作しています。

テクニングの授業においても、日本のように一斉に写生をするとか、人物を描くなどという授業は、ほとんどなく、その内容は個人の感情、感覚を大切にしたり社会的な学習といえます。例えば、社会問題を扱うことから、はじまり、最後にそれをなんらかの形で自分の表現につなげていくという方法で、最後にポスターができる子供、箱庭的人形ができる子供など、様々なものができるわけです。一つの制作にかかる時間、1年間で作る作品の数など、生徒によってすべて違うわけです。



Slöjd の授業風景

これらのことから言えることは、とにかく美術教育が、生活と密接な関係のもとに行なわれているということ、特にスロイド教育では生活に直接関係してくる品物への教育をしているということです。美術教育というものが、自分達の環境に対する関心…つまり生きるということへの関心の上になりたっているということなのです。

ストックホルムに住んでいた私はその建物の古さ、品物の古さ、そしてそれを大切に作る気持ちに驚きました。古いものをただ保存するのではなく、昔のまま職人の手で作り出され、それを使い続けているということは、そこに彼らが美を、そのよさを見い出しているからでしょう。街全体が、私になにか語ってくれるような、美しいだけでない、歴史の古さだけでない、心打つ表情がそこにあったのです。それが文化というものでしょうか。私は、工芸というものを生活、生き方の具体化されたものであると考えます。つまり、文化は我々そこに生きているものと密接した生活文化でなければならないのであり、工芸は生活と美を結ぶものとして、文化をつくるものとして、非常に重要な役割を持つわけです。

街には古物屋が並び、主婦はいろいろな品物をそこから買って実際に使うのです。一度買ったものは何度も修理し、作り直し大切に使います。だから物を買う基準というものが日本のように物が氾濫していて、使い捨てがあたりまえのようにされている社会とは違ってくるのです。少々高くてもよい品物を、よい品物とは、丈夫で、使いやすく、あきないなど考えられますが、庶民がこういう物を望めば、生産者側の基準もそこにいくわけです。そして、そこで作られ、使われる品物の上



Stockholm の古い街並

に文化が成り立っていくのです。

スウェーデンの自然的条件、環境を考え、彼らがいかに生きてきたのか、スウェーデンであの長く暗く寒い冬を経験すれば、彼らがどんなに生きるということに執着しなければならなかったか、自分達の環境に気を配らなければならなかったか、よく理解できます。

そして、それは生活を大切にすることにつながる事なのです。個人主義が徹底し、私個人の生活を重視するという事、生活を豊かにするために、彼らは日用品に美的価値を与え、使うもの、生活する場所など、環境に対して最大の関心を払いました。そして、この基本的考え方が、スウェーデンの美術教育の基盤となっているのではないのでしょうか。つまり自分達の環境に対する、また生活に対する教育を美術教育の大きな目的とし、そのためにテクニングの授業の内容が決まり、スロイドの授業が独立して、その必要性が重視されるわけです。子供達は、伝統的技法を学ぶとともに、そのよさを知り、自らの手で物を作ることを通して、様々な造形の喜びを経験していきます。

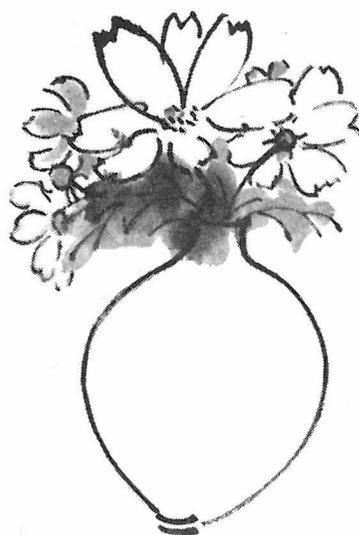
教育について語ろうとすれば、その国の歴史的な事から現在の社会的状況まで多くの事について話さなければなりません。まして、私自身の経験からしか、今は言えないのですから、とてもむずかしいことです。しかし、日本の普通教育における美術教育は現在いろいろな問題を持っています。美術科と技術科と家庭科の関係においても、美術科の中での領域問題にしても、教えている内容の適当性にしても、多くの事が考えられます。私はそんな中で一番教えている内容と生活の関係について考えたいと思います。もっと美術の内容が生活に密着した、専門家を養成する教育ではないのですから、生徒の生活、生き方に結びついたものにならなければならないはずで、そんな意味で、工芸というものは直接我々の生活にかかわってくるものとして美術教育の中で大きな役割を持ってきます。今は、その工芸を、3つの教科でばらばらに教え、全体的な見通し、意義について教えることは問題にされていません。そのような中で、私が違ったスウェーデンの美術教育を実験できた事は、本当に意義のあることでした。そして、スウェーデンの現場の先生方の「今、これは実験段階です」とか、「今度こういう方法でやるつもりです」とか言う意欲的な態度は、私

に新たなやる気と熱意を与えてくれました。

(信州大学教育学部4年生)



Skansen でみせてくれるガラス手工芸



スウェーデンの家庭生活

—家事・育児をする夫、完全男女平等の実現へ—

Visit to Swedish Families

秋 元 薫 氏

Miss Kaoru Akimoto

秋元さんは都立戸山高校3年生で、昨年秋、当スウェーデン社会研究所の創立10周年記念事業の1つとして、東京新聞と共催し、在日スウェーデン大使館およびSAS航空の後援のもとに行ったスウェーデンに関する高校生論文コンクールにおいて、1等に入賞され、去る8月末スウェーデンを約1週間見学されました。本稿はその報告で、11月20日東京新聞に掲載されたものをその諒解をえて転載します。

福祉国家スウェーデンで、まずチャイルド・センターを訪ねた。3カ月以上7七歳までの子供を、午前6時半から午後6時まで預かるこの施設では、母親は自分の勤めに合わせて子供の送り迎えをしている。

朝食から昼食、おやつまで出るのは、働く母親にとって大きな利点だろう。

子供を年齢別に四組に分け、1組12人について三部屋、3人の大卒女子職員が当たり、子供用台所、体育室、音楽室、屋内外の遊び場まで整っている。清潔な白木の家具・備品の中でのびのびと遊ぶ子供たちの明るい表情がとても印象的だった。

これほどに社会保障が整備された背景には、労働力不足もあろうが「平等」の観念がまず考えられよう。

「社会一般において男女平等を実現するには、家庭内の家事・育児から、責任を分け合わなければならぬ」として1968年、基礎課程のすべての科目が男女共修になった。公立エッペリーケン校は婦人校長。基礎課程では編み物、縫い物をする男子、木工、金属工芸をする女子を見たが、楽しそうだった。

教科書には家庭内で家事・育児をする父親（主夫）のさし絵があり、伝統的な「男女の役割分担」を解消しようと努めている。私立クリストフ

ァー校では、料理、織り物、工作、体操など男女共修だが、驚いたことに教科書がない。教科書は先生と生徒で作るのだという。

仕事を持つ女性は家庭内ではどのような主婦だろうか。ストックホルム郊外の住宅都市ベーリングビーに住む、エッペリーケン校の女教師パルムボルグさんの家を訪ねた。ジャーナリストのご主人と、18歳を頭に3人の子供と暮らす主婦である。庭つき住宅に住み、2軒の別荘を持つ、スウェーデンでは中流の上くらいの家庭。これも共働きのたまものという。

夕方から仕事に出るご主人が、昼間の家事を受け持ち、午後5時に彼女が帰宅すると交代。子供たちの手伝いぶりや、機能的な台所設備なども見のがせなかった。夏の3カ月は家族と別荘で過ごすという、余裕ある人生を送る彼女の、生き生きとした表情がまぶしかった。

スウェーデン女性の肉体と精神のたくましさ、今日の平等社会を作った。それを実感として得ただけでも、貴重な体験だったと思う。

—次に見学中のスナップを説明をつけてお目にかけます。



- ①…チャイルド・センターにて。広々とした教室の一角に視聴覚機材が常備され、子供達は自由に利用できる。タペストリー（織物の壁掛け）などの楽しいインテリア、観葉植物・切り花を飾り、自然に親しむよう気を配っている点にも注目。（8月31日）



- ②…チャイルド・センターにて。白木の家具・備品の能率的に配置された明るく清潔な教室。子供の「**ミ**労作・創造教育」を重視して、できあいのおもちゃは少ない。画面左のテーブルではお絵かき、右のテーブルではフランス人教師が派遣され唯一人のフランス人子弟の為、フランス語を個人教授している。その子供は他の子供達とはスウェーデン語で話すが、母国語を忘れぬ為、スウェーデン教育庁が行っている「**ミ**差別のない教育」の一部である。移民の多い国(人口の10%)だけに、大変な仕事だそうだ。



- ③…公立エッペリーケン校にて。画面左の婦人が校長先生。木工を選択した女生徒が、**ミ**かんなをかけている。この教室では男生徒8人に対して女生徒3人と少なかった。編み物の教室では女生徒7人に男生徒5人、調理の教室では男女同数6人ずつだった。どの教室も12人程度が利用するにはもったいないくらい広く、器具・設備も豊富である。（8月28日）



- ④…エッペリーケン校の女教師、パルムボルグさんのお宅で。18歳と10歳の娘さんと。ここでも植物を大事にし、先祖代々伝わる織物や家具を生かす、**ミ**スウェーデンの美」を見た。また、私達の為に親子の会話まで英語でしてくれたのだが、お互いを冷静に見つめ、対等の立場で話し合う姿には、日本にはない個人主義の良さがあった。（28日夜）

（前掲の見学の報告の筆者、秋元 薫氏の当選論文は、本月報の第9巻12号に掲載しましたが、その英訳（当事務局訳）をご参考までに次に掲げます。）

'On women's labour which I should like to learn from Sweden'

Miss Kaoru Akimoto

Sweden is a very far country from Japan which is an island country lying east of the Asian continent. Information about Sweden is neither much available in Japan nor much reported in our daily papers. My knowledge about Sweden until last year had been only such as Sweden was a country of 'high standard of living', 'advanced welfare society', and 'covered by forests and lakes'; these I had learnt from a geographical text-book of my high school. But, last year, at a household lesson of the high school, I had a chance to write a report on 'women's labour'. In the report I tried to compare women's social position in some countries including Sweden, and was surprised to know how high position Swedish women occupy in the society of Sweden.

So I would like to take up women's labour in Sweden as theme for my essay this time. What interested me most in considering the topic was the following three points.

- 1) equality problem between sexes among different kind of occupation,
- 2) how they harmonize employment with household and child-rearing work,
- 3) comparison of 1) and 2) with those of Japan.

After the Great Depression of 1932, when 22.4% of the employees became jobless in Sweden, trade union movement by women became active and social security toward women and other various social reform policies were gradually introduced. Since then, a number of married women began to work; nowadays, more than 60% of married women have employment. This fact would not only be explained by the general development of women's positive spirit to work, high standard of education, and social security including day nursery facilities, but also by the Swedish labour market situation that needs women's labour force as well as men's.

Looking at the ratio between sexes in the different kind of employment, women's ratio in beauty salon is 91%; teachers, 82%; household and restaurants, 80%; textile work, 73%; clerical work, 72%: these figures are almost the same as in Japan. By these figures, we may say that it is quite necessary to develop further employment for women in the two countries to attain equality in its true sense. But it seems that there are much more freedom and chances for the Swedish women to choose their own way of living and to test their own ability. For instance, the number of women's drivers of bus, truck and subway electric car is increasing. In Japan we can rarely find such woman drivers.

Wage ratio between sexes shows that in Sweden women's figure is 83.3 in comparison to men's 100; in Japan women's figure is only 47.5. According to the Swedish agreement signed in 1960 of 'equal pay for equal work between sexes, there cannot be such big difference in the figures between Swedish men and women. But I guess that various factors like the level of women's education, the impossibility of women's continuous working due to the problem of delivery and child-rearing, women's desire for part-timer, and the limit of woman's physical labour may account for the reason. None the less, the Swedish women are both the envy and admiration of the Japanese women.

I would like to consider, next, how they solve the problem of both employment and child-rearing work at home. In Japan, if women want to work continuously after their marriage, it would be necessary to fulfill the following three conditions: 1=understanding and co-operation by husband, 2=provision of facilities for day nursery, 3=healthfulness of family members. It is quite rare that Japanese married women are able to work with these conditions realized. In Sweden these conditions are guaranteed by law and are regarded as quite natural. So, in this respect, Japan is much less advanced, we must say.

We Japanese are much impressed by the Swedish, first-in-the-world, law of man and wife being able to enjoy parenthood benefits. Although it is still rare (6%) for men to put this system into practice, there seems to be substantial support for this law.

Women, why do they work? The answer is that they want to lead the positive life based upon freedom and equality. It may safely be said that women in Sweden, after long many years of endeavour, can now obtain employment in that sense. Women in Japan should, I believe, learn much from the women's labour movement in Sweden.

最近のスウェーデン経済・社会ニュース (SIPニュース)

自由党の少数党内閣成立

この10月5日に将来のエネルギー政策について意見の一致をできずに辞任した中央党・自由党・保守党の連立内閣をひきついで、新しい自由党の少数党内閣がこの10月18日に成立した。首相であり自由党のリーダーでもあるオウラ・ウルステーン氏 (Ola Ullsten) は19人から成る内閣を代表すると共に国会で政策方針を公表する。

新内閣の仕事は社会自由主義の考えにたったものであり、できるかぎりの広汎な基礎にたった政策をうちたてるよう努力すると氏はのべている。

この仕事の下を流れているものは、内閣のメンバーのイニシアティブ、責任及びアイデアリズムを基にした社会を建設しようとする努力である。多様性と市場経済に社会福祉と正義とをとり入れてゆきたいとしている。

新政府は官僚化に反対し地方自治を拡大してゆく。文化面とマスコミュニケーションの面では、より多くの声に耳をかしてゆく。研究・開発にこれまで以上の援助を与えてゆく。

市民権及び自由については、これまで以上の強力な保護を加える。

労働をこれまで以上に人間的なものとするを目的とした新しい法律も成立している。この仕事は今や、こうしたアイデアを注文上の条項から事実へと変かくしてゆく事にある。男女間の身分の同一性は、新政府の政策の基礎になっている。

スウェーデンの外交政策面では、首相はその方向ははっきりと定まっているとのべている。中立政策と共に、世界の自由と正義について活発な活動を行うことがもりこまれている。さらに開発途上国への援助も増額しなければならない。

エネルギー政策は、エネルギーの必要度合に注意し、これまで以上に効率の良いエネルギー保存を行い、新しい再生可能なエネルギー源を開発し、石油への依存度をへらし、将来の行動の自由を保

持することにある。政府はまた、その仕事の一つとして、国としてのエネルギー供給を確実に信頼性をあげることをかかっている。

スウェーデン経済が回復に向いつつあることを考えて、ウルステーン首相は最も重要な仕事は経済を平衡状態におき、スウェーデンに主たる工業先進国の一つとしての地位を定めさせる事にあるとのべている。失業についてはこれを少なくする努力を行い、投資をまし、雇用政策の為に定めたガイドラインをまもり、さらには将来の産業政策と地域政策とを定める必要がある。さらに税法についても改正の要がある。

演説の結論として、首相は全国民の利益となる意見の一致をみた結論をだすよう努力はつづけるとのべている。政府と国会とは密接に協力する事によって共通の責任を負い相互に信頼しあう状態にあらねばならないとのべている。

(新内閣)

首相オウラ・ウルステーン氏、47歳。司法相スヴェン・ロマーヌス氏、72歳。外相ハンス・ブリックス氏、50歳。国防相ラーシュ・デ・イエール氏、56歳。保健及び社会問題相ガブリエル・ロマーヌス氏、39歳。同副大臣、ヘッダ・リンダール夫人、59歳。運輸及び通信相アニータ・ボンDESTAM夫人、37歳。予算及び経済問題担当相インゲマル・ムンデボー氏、48歳。政府雇用関係相マリアヌ・ヴァールベリイ夫人、61歳。教育及び文化相ヤーンエリック・ヴィークストレーム氏、46歳。同副大臣ビルギット・ローデ夫人、45歳。農務相エーリック・エーンルンド氏、60歳。商務相ハーダール・カーシュ氏、45歳。労働相ロルフ・ヴィルテーン氏、47歳。同副大臣エヴァ・ヴァインテル夫人、57歳。住宅及び計画相ビルギッツ・フリッゲボー夫人、36歳。産業相エリック・ヒュス氏、65歳。自治相バットィル・ハンソン氏、60歳。調整担当相カール・タム氏、39歳。

スウェーデンの主要交易10ヶ国

輸出相手国		輸入相手国			
	1978	1977		1978	1977
英国	11.3	10.9	西独	18.5	18.6
ノルウェー	11.2	12.3	英国	11.6	10.4
西独	10.8	10.1	アメリカ	7.5	7.3
デンマーク	9.3	9.6	デンマーク	7.3	7.0
アメリカ	6.2	5.3	フィンランド	6.0	5.6
フィンランド	5.7	6.3	ノルウェー	5.3	6.0
フランス	5.3	5.6	フランス	4.4	4.0
オランダ	4.7	4.2	オランダ	4.1	4.6
イタリア	2.9	2.6	日本	3.0	3.7
ベルギー	2.8	2.8	ベルギー	3.0	3.3

今年の1～6月期の全輸出高は485億7,700万クローナ（邦価約1兆9,659億6,500万円）に達し、これは前年比で16%の上昇であり、一方、輸入は1%上昇して447億8,700万クローナ（2兆154億1,500万円）であった。資料 中央統計局

1978年ノーベル賞

1978年度のノーベル賞は10月初旬に公表された。文学賞はニューヨーク在住の74歳の散文作家であるアイザック・バシエヴィス・シンガー氏 (Isaac Bashevis Singer) に対し、氏の「ポーランド系ユダヤ人の文化伝統を根拠とした、普遍的な人間生活を生々としたものとした熱烈な語り方の技法」に対してあたえられた。

生理学及び医学賞はスイスのバーセルに居住するウェルナー・アルベール教授 (Prof. Werner Arber) と、アメリカのボルチモアにあるジョン・ホプキンス医科大学の共に微生物学の教授であるダニエル・ネイサンス (Daniel Nathans) 教授とハミルトン・O・スミス (Hamilton O. Smith) 教授の2人に、共に与えられる事となった。この理由としては、「制約酵素の発見と分子遺伝学への応用」が挙げられている。

物理学賞はモスクワのピオトル・カピッツサ教授 (Prof. Piotr Kapitsa) に対し、その低温物理学の分野での発見に対してと、アメリカのベル電話研究所のアルノ・ベンジラス博士 (Dr. Arno Penzias) とロバート・W・ウイルソン博士 (Dr. Robert W. Wilson) の両名に対し、その宇宙からのマイクロウエーブ放射線の発見に対して与えられた。

英国のピーター・ミッチェル博士 (Dr. Peter

Mitchell) は「ケミオスモティック理論の型成を通じ、生物学的エネルギーの移転についての理解に貢献した事により」化学賞をうけた。

経済学賞は、アメリカのカーネギー・メロン大学教授であるハーバート・A・サイモン教授 (Herbert A. Simon) に対し、その経済機構内での意志決定についてのパイオニア的研究について与えられた。

今年の各賞賞金は725,000クローナ（3,262万5,000円）で、これに比較すると前年は70万クローナ（3,150万円）丁度であった。受賞式はアルフレッド・ノーベルの死去の日である12月10日にストックホルムで行なわれる。

国際オンブズマン協会

当市の日刊紙であるダーゲンス・ニィヘテル紙 (Dagens Nyheter) がそのインタビューで伝える所によれば、国会のオンブズマンであるウルフ・ルンドウィーク氏 (Ulf Lundvik) が、このほどカナダのエドモントンに本拠地をおく団体として新設された国際オンブズマン協会 (International Ombudsman Institute) の議長に選任された。

この協会の設立については、1976年にカナダでオンブズマンの国際的な集まりが行なわれた時に検討された。その年の世界中のオンブズマン数は29であり、これはその後約60にまでふえている。

この新しい協会はオンブズマンの為の研究のセンターとなり、助言的な役割をはたす。図書館も設立されて、オンブズマンについての全ての文献や記事が集められる。

オンブズマンの概念及びその言葉自体は、1809年に裁判と民間行政の為の国内のオンブズマンの事務所が設立されたスウェーデンにその起源をもつ。このスウェーデンのオンブズマン機構の研究の為に、全世界からいろいろな団体や代表団がスウェーデンをおとずれつつけている。